

# 彫刻一筋仲間のおかげ

楠元香代子さん (67)

彫刻家、崇城大学名誉教授

布一枚をまとった女性が宙を見つめている。新型コロナウイルス禍の中の希望を表現した樹脂像「曙」は2020年の改組新第7回

多くの人の目に触れるモ二ユメントも数多く手掛けてきた。「彫刻一筋47年。走り続けてこられたのは仲間のおかげ」と感謝する。

日展で最高賞を受賞した。仰ぎ見るまなざしとその反対に伸びた腕からは、光を浴びる情景が浮かぶ。複雑なポーズをまとめた構力と技術力が評価された。

霧島市出身。美術部で色彩を描いていた国分高校時代、鹿児島市で初めて開催された日展巡回展で彫刻作品を見て心を動かされた。「まさか作る側になるとは

霧島市の塩湊温泉に立つ坂本龍馬とお龍の新婚湯治碑、鹿児島市の山形屋正面

を本格的に目指すように。彫刻界に足を踏み入れた

玄関横の丹下ウメ像など、

彫刻界に足を踏み入れた



「曙」像の前で「作品の方から話し掛けてくるような彫刻を作りたい」と語る楠元香代子さん＝鹿児島市石谷町(田中公人撮影)

などで後進を育てながら制作を続け、日展をはじめとした多くの公募展で精力的に作品を発表してきた。学生時代に仲間と3人で立ち上げた「鹿児島女流彫塑会」は毎年展覧会を開き、今年で47回目。作家、指導者として鹿児島の彫刻界を開拓し、リードし続ける。

これまで造形の美しさをストイックに追い求めてきたが最近少し力が抜けてきた。「縛りをほどいて自身の内面を投影し、作品から自分の心の声が聞こえてくるような彫刻を作りたい」と新たな境地で向き合っている。(下吹越愛莉)

のは、鹿児島大学教育学部美術科の学生時代。今も師と仰ぐ彫刻家、中村晋也さん(95)＝鹿児島大名誉教授

の表現にのめり込んだ。「絵に物足りなさを感じて進路と進むべき道が定まった。

を忘れて創作のエネルギーを注いだのが彫刻だった」

卒業後も崇城大学(熊本)

くすもと・かよこ 1954年、霧島市生まれ。東京学芸大学大学院修士課程修了。2006～07年、スリランカ・キャラニヤ大学に客員教授として赴任した。近年は祈りをテーマに女神像を多く制作する。日展会員。著書に「スリランカ巨大仏の不思議」。鹿児島市在住。